

愚行弑

映画文学人生論

- 0311) 仮面の告白 三島由紀夫 参考：不道德教育講座
0321) 広場の孤独 堀田善衛 参考：方丈記私記
0331) 壁 カルマ氏の犯罪 安部公房 参考：砂漠の思想
034)1 悪い仲間 安岡章太郎 参考：僕の昭和史
035)1 驟雨 吉行淳之介 参考：軽薄のすすめ

人に迷惑をかけて死ぬべし

二年前、愚行篇として読んだのは次の五篇。

金閣寺

三島由紀夫

太陽の季節

石原慎太郎

されどわれらが日々

柴田翔

麻雀放浪記

阿佐田哲也

書を捨てよ街へ出よう

寺山修司

昭和二十年代後半から四十年代にかけての話題になった作品を選んだつもりだったが、これらで当時の文学を代表させてよいかどうかは疑問——という反省から、今回は第二次戦後派と第三の新人の作品（小説及びエッセイ）を選んでみた。

仮面の告白

（不道德教育講座） 三島由紀夫

広場の孤独

（方丈記私記） 堀田善衛

壁（砂漠の思想）

安部公房

悪い仲間（僕の昭和史）

安岡章太郎

驟雨

（軽薄のすすめ） 吉行淳之介

五人の作家のうち三島由紀夫、堀田善衛、安部公房が第二次戦後派、安岡章太郎と吉行淳之介は第三の新人に分類されているが、年齢的にはそれほど開きはない。大正中期から末期にかけて生まれ、主として戦後に文学者として活動した。つまり、全員が昭和初期の軍国主義教育をもち



愚行式

映画文学人生論

に受けたアプレゲール（戦後派）の作家である。前回の五人は三島由紀夫をのぞいて昭和生れで、戦時中の軍国主義的教育に加えて、戦後の民主主義教育も受けている。彼らは第三の新人もふくめて第三次戦後派と呼んでよいと思う。

私見によれば、軍国主義教育に対して抵抗、反発、屈折した精神のエネルギーを戦後になって文章表現に発散させ、頭角をあらわした作家はすべて戦後派である。彼らは新しい価値観を求め、偽善的な古い価値観をひっくり返した。

たとえば、三島由紀夫が「人に迷惑をかけて死ぬべし」「教師を内心バカにすべし」などと『不道德教育講座』で説き、吉行淳之介が「重厚」を良しとし、「軽薄」を軽んじる風潮を皮肉った。

この二人は同学年の生まれで、軍国主義教育を受けながら東大に入学したという学歴の他に、幼児の頃、母親がいるのに同居を許されず、祖母に育てられたことや徴兵検査で合格したのに、病気で即日帰郷となった点などの共通点がある。

一方、昭和二十年八月の終戦時に安部公房は満州の奉天、堀田善衛は中国の上海にいた。この二人には祖国を喪失した亡命者の雰囲気がつきまとう。寺山修司の父親はセレブスで戦死した。安岡章太郎と阿佐田哲也の父親はエリート軍人だったが、終戦後は失業者になっている。

おわり悪ければ、すべて悪し 三島由紀夫